様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １７ 日現在

機関番号：８２６２１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０３１１０

研究課題名（和文）美術館の所蔵作品を活用した探求的な鑑賞教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Developments of an Inquiry Based Appreciation Programs Utilizing Collections of museums

研究代表者
一條　彰子（Ichijo, Akiko）

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・主任研究員

研究者番号：４０３２１５５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,300,000円

研究成果の概要（和文）：所蔵作品を用いて先進的な鑑賞教育を行っている、海外の主要な美術館と学校の現地調査を行った（オランダ、フィンランド、デンマーク、シンガポール、台湾）。その結果、①対話による探求的な鑑賞（対話鑑賞）が広く行われていること、②各国の教育課程が反映されていること（カリキュラム・リンク）、③美術科以外の教科へも拡げようとしていること（教科横断型）、④オンラインの活用、等の傾向が明らかになった。これらを参考に、国立美術館の所蔵作品62点を、高精細画像で見ることができるオンライン教材「鑑賞素材BOX」を開発し、学習指導要領に準じた教科横断型の鑑賞の授業を、どこででも行えるようにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
北欧とアジアの美術館における先進的な鑑賞教育の現地調査と、学校視察や教育行政担当者へのインタビューを行い、その国の教育システム全体から鑑賞教育を捉えるよう試み、論文・学会等で報告した。
また、研究成果物として公開したオンライン教材「鑑賞素材BOX」は、教科横断型の探求的な鑑賞授業を全国どの学校でも行えるよう支援するものであり、オンライン活用が急務となった教育現場に提供できるリソースとして社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：A field survey was performed at major art museums and schools in the Netherlands, Finland, Denmark, Singapore, and Taiwan that conduct advanced art appreciation education using works in their collections. It found that, among others: interactive appreciation with inquiring conversations was prevailing; appreciation program was made to link curriculum; cross-curricular efforts to expand beyond art were made; online education was utilized. Building on the findings, we have developed the “Art Appreciation Material Box” website that provides access to high-resolution images of sixty-two works from the collections of the National Art Museums to enable educators everywhere to give cross-curricular classes following the Education Ministry’s guidelines.

研究分野：美術館教育

キーワード：鑑賞教育　美術館　教材　学習指導要領　所蔵作品　探求的　オンライン　探究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者である筆者は、教育普及を担当する学芸員として 1998 年より東京国立近代美術館に勤務しており、美術館の所蔵作品を用いて児童生徒に鑑賞機会を提供することを、業務および研究の主軸としている。本研究を開始した 2016 年当初の、美術館と学校双方における鑑賞教育については、様々な施策や授業実践の開発などによって以前に比べ活性化してきたが、いくつかの点で課題も残っている状況であった。

2008 年の博物館法の改訂では、「博物館の教育機能の充実」が明確に方向づけられた。また同年改訂の学習指導要領でも、「言語活動の充実」や「伝統と文化に関する教育」を重視した鑑賞指導を、「美術館との連携」や「文化財などの積極的活用」において行うよう明示されて以降、小中学校での「アートカード教材」利用や美術館訪問が増えてきていた。2015 年のアンケート調査（独立行政法人国立美術館、教員・学芸員等 240 名による）では、58%がアートカード等の鑑賞教材を活用し、48%が美術館と連携した鑑賞授業を行い、78%が過去 10 年間で鑑賞教育を取り巻く状況は良くなっていると感じている。しかし同時に、鑑賞する作品の選択や授業法において、迷いや知識不足を感じているということも明らかになっていた。

このような中で筆者らは、前回の科研費研究[i]において、米国とオーストラリアの美術館のプログラム調査を行い、①「探求的な鑑賞」が基本理念となっていること、②国や州の学習スタンダード（学習指導要領にあたる）と所蔵作品をつなぐ「鑑賞テーマ」が提示されていること、③美術科のみならず他教科を統合する鑑賞プログラムが開発されつつあること、④オンライン活用が進められようとしていることを明らかにした。また、これらの調査を参考に、日本の国立美術館と博物館の所蔵作品によるウェブ教材「鑑賞教育キーワード map[ii]」を構築し公開した。

２．研究の目的

本研究は、この前回の研究を継続し、拡大発展させるものと位置付けた。研究課題に加えた「探求的[iii]な鑑賞」とは、Inquiry based appreciation（探求的活動を基盤とした美術鑑賞）を指す。探求的な鑑賞は、学習者自身による観察や発見、知識や経験、イメージや推理を原動力とし、一方的な解説ではなく、相互的な対話を基本とすることから「対話鑑賞」ともいわれる。対話鑑賞の進行役（ファシリテータ）は、美術館では教育担当学芸員、契約エデュケータ、ボランティア、ドーセント、ガイドなどが担う。2015 年当時、中央教育審議会の論点整理で示され、後に「主体的対話的な深い学び」として学習指導要領に示されたアクティブ・ラーニングにつながる概念でもある。本研究の具体的な目的は次のとおり。

(1)海外で行われている最新の美術鑑賞教育の理論と方法を調査する。
(2)国内の美術館の所蔵作品を用いて、探求的な鑑賞教育のプログラムを開発する。
(3)研究成果を公開し、広く教育現場と美術館に還元する。

３．研究の方法

研究テーマが博物館教育と学校教育の領域にまたがり、また、オンライン上での学習コンテンツを成果物とするため、研究分担者を、①教育普及担当学芸員による学芸チーム、②教育学・教育政策の専門家による教科チーム、③情報担当学芸員による技術チームに分け、研究課題をそれぞれの立場から究明した。

海外の先進的な美術館で行われているスクール・プログラムの現地調査は、世界的な鑑賞教育の潮流を把握し、今後の日本の鑑賞教育の方向性を考える上で重要である。前科研で米国と豪州の調査を終えているので、本科研では北欧とアジアを対象とした。学校の視察とインタビュー、教育行政担当者へのインタビューもできるかぎり併せて行い、その国の教育システム全体から鑑賞教育を捉えるよう試みた。美術館での共通調査項目は次の通り

・対象は K-12（幼稚園から高校）までのスクール・プログラム
・スクール・プログラム（ギャラリートークやワークショップ等）の実見、または模擬体験
・教育担当学芸員へのインタビュー（鑑賞教育の理念と方法、所蔵作品の活用法、学校連携の仕組み、学習スタンダード（カリキュラム、シラバス、学習指導要領）の反映、教員研修、組織、オンラインの活用、今後の目標について）

3 年間の研究予定は、追加調査が生じたため 4 年間に延長した。

2016 年度：海外調査（オランダ）、基礎資料翻訳
2017 年度：海外調査（フィンランド、デンマーク）、基礎資料翻訳、学習会、学会発表
2018 年度：海外調査（シンガポール、台湾）
2019 年度：オンライン教材「鑑賞素材 BOX」開発、学習会、学会発表（コロナにより中止）

４．研究成果

(1)海外調査

①オランダ調査

オランダの美術館のスクール・プログラムは、それぞれの所蔵作品に明確に関連付けられた教育ミッションに基づいて行われる。基本的には、1 クラス 30 名程度の児童生徒を 2 グループに分け、契約エデュケータが一人ずつ付いてギャラリー内で対話鑑賞を行うことが多い。これに、美術館アトリエ（ワークショップルーム）での作品制作を組み合わせることもある。多くの美術館は、事前授業用の教材をオンラインで提供している。

国立美術館（ライクス・ミュージアム）は設立当初からの長い美術教育の伝統があり、年間 15 万人の児童生徒を受け入れている。教育ミッションのひとつは、「オランダのすべての小学生に、一度はレンブラント《夜警》を見に来てもらうこと」。《夜警》は、17 世紀オランダ絵画黄金期の最高傑作であるとともに、国王貴族の肖像画ではなく市民の集団肖像画である点で、市民文化や自由の象徴とされる。このことから現代においても、人種、主義主張、文化背景、宗教を超えて、オランダに住むすべての人にとって意味があると国立美術館はとらえている。国立美術館の所蔵作品は、学校の歴史教科書に数多く取り上げられていることから、高校生向けのオンライン教材には教科書会社の協力もあり、鮮明な最新のデジタル技術が駆使され解説も充実している。教員研修も盛んで、高校教員向けには、社会学、地理などの教科での活用法も含まれる。

ゴッホ美術館は特に幼児と小学生へのプログラムを充実させようとしている。子どもたちが主体的にゴッホについて探索できるよう、エデュケータの持つバッグには、弟テオへの手紙や当時のお金のレプリカなどの小道具が入っている。事前学習アニメーションは、二人の女性が事件を解決するためにスクーターでゴッホ美術館に乗り込むというストーリーで、その衣装は実際に子どもたちが会うエデュケータと同じになっており、子どもたちの興味を引き付ける。教員向けの授業案が、発達段階別に細やかにオンラインで提供されている。

アムステルダム市立美術館（ステデリック・ミュージアム）は近現代美術を専門とし、世界で初めてオーディオツアーが開発された美術館である。教育部の方針は「困惑から好奇心へ」。近現代美術に接した際、鑑賞者はわからないと戸惑うが、そこで終わらせずに好奇心につなげることをモットーに掲げている。40 人の契約エデュケータは、教育部が作成した問いやアクティビティを活用して探求的な鑑賞を行う。

以上アムステルダム市内の 3 美術館は、共同で「ミュージアム・バス」を運行し、60㎞までの学校に無料で提供している。このほか、ユトレヒト中央博物館は建築とデ・ステイル、マウリッツハイス美術館は 17 世紀オランダ黄金期の絵画という、主要な所蔵作品の理解に焦点を合わせて、スクール・プログラムを展開している。

これらの調査から、オランダの美術館教育の特徴として、①所蔵作品と館のミッションに明確に基づいた教育プログラム、②オンラインの積極的な活用が挙げられよう。なお、学習指導要領の反映に関しては、美術館によって強弱がある。学校は学習指導要領に従う義務はあるが、学校システム自体が多様で、学校の裁量範囲が広い点は、他のヨーロッパ諸国とは異なるようである。なおオランダ調査では、近年注目されている、探求的なギャラリートーク理論「I　ASK」について、発行元であるユダヤ歴史博物館よりハンドブックを入手し、オランダ語から翻訳も行って参考とした。

②フィンランド・デンマーク調査

フィンランドは 2014 年にナショナル・コア・カリキュラムを改訂し、各教科において包括的学習を推進している。国立教育庁、美術館３館、小中学校２か所、放課後スクールという異なる組織を縦断的に訪問調査した。調査した 2017 年は、フィンランド文化財団が建国 100 年を記念して、全国の 8 年生（中学 2 年生）6 万人を博物館、劇場、コンサート、オペラなどに無料招待する 3 年間の芸術助成事業「アート・テスター・キャンペーン(ATC)」が開始された年である。

首都ヘルシンキの国立現代美術館キアズマと国立アテネウム美術館では、8 年生を 4000 人受け入れる計画で、対話鑑賞とアトリエでの討議が行われていた。フィンランド第２の地方都市にあるエスポー市立近代美術館は 500 人受け入れ予定であった。①アーティストの事前授業、②美術館訪問、③事後授業（発表、美術展、パフォーマンス、ビデオ、アーティストとのスカイプなど）の三部構成で行われており、筆者らが訪問した際は、作品に対して社会、個人、プロセス、素材の観点から自分の考えを明確にした上で、アーティストを交え全員でディスカッションする活動が行われていた。美術館の特徴や普及活動の蓄積を生かした学習活動が行われていたといえる。

一方、小中学校の調査では、これまでの報告通り、少人数のクラス編成、設備の充実、教員の質が確保されている状態が確認できた。放課後に子どもたちがそれぞれの興味関心に従って通うエスポー市立美術学校は、5 歳～20 歳まで 1400 人が在籍し、絵画やテキスタイル、陶芸、写真、CG などを学ぶことができる。年間 2 億円の予算の半分が市や国の支援であり、カリキュラムは国立教育庁の教科調査官と共同で作成されていた。

フィンランドの美術館教育の特徴としては、①豊かな教育財政に支えられた質の高さ、②多様性理解と個性の尊重からくる選択肢の多さが挙げられよう。

また、学芸チームのみの参加となったため予備調査の位置づけではあるが、フィンランド調査とあわせてデンマークに赴き、デンマーク・ナショナルギャラリー、アーケン近代美術館、ルイジアナ美術館の 3 カ所で学校対象の鑑賞プログラムの実見調査を行った。それぞれに所蔵作品を生かしたスクールプロラムが盛んにおこなわれ、特にアーケンでは、近年の教育改革に基づいた長期的な学校連携プログラムが試行されていることを確認した。

③シンガポール調査

新興著しいアジアの美術館における教育を視察するため、2018 年にシンガポールの調査を行った。

2015 年に設立されたばかりのナショナルギャラリー・シンガポール（NGS）は、旧市庁舎と旧最高裁判所を改装して作られた大規模美術館で、地下に広大な教育センターを併設し、多数のファミリープログラムを運営する。2018 年には、教育省と協働し 5 年かけて構築したスクール・プログラムを開始させた。これは、教育省が小学校シラバス（学習指導要領）で指定した「鑑賞すべき作品」に関するものである。50 作品程度の「鑑賞すべき作品」のうち 6 割は NGS が所蔵するため、年間 800 校、4 万人の児童生徒が来館することになり、約 40 人の契約エデュケータが対応する。教員研修では 3 日間かけてクリティカルシンキングやプログラム作成を学ぶ。

2008 年に設立されたプラナカン博物館は、プラナカン文化（中国から渡来した男性と地元の女性が結婚して生まれた子孫による混合文化）を紹介する特色ある博物館である。幼稚園 5 歳児のガイドツアーでは、10 人ずつの 3 グループが、英語で対話的なギャラリートークを受けていた。幼児が鑑賞しやすい食べ物、衣服、婚礼に関する展示に絞った「見て、考えて、推理する」ガイドである。

このスクール・プログラムのエデュケータ 3 人は、プラナカン博物館の所属ではなく、アートロフト http://www.artloft.com.sg/という民間組織から派遣されている。シンガポールには、アートロフトのような民間の教育企画会社が、美術、演劇、音楽の 3 分野に５社程度ずつ存在する。これらの会社は、学校向けプログラムを、ナショナル・アート・カウンシル（NAC）が運営するアート・エデュケーション・プログラム https://aep.nac.gov.sg/nacaep/nacaep/に提出し審査を受ける。認定されたプログラムは NAC-AEP のサイトに掲載され、そこから学校が申し込むと、参加費や博物館入館料が支払われるという仕組みである。プラナカン博物館以外に、アジア市民博物館とシンガポール国立博物館でも、アートロフトの若いエデュケータにガイドを実演してもらったが、変装ツールや小道具を駆使しての飽きさせない内容で、所蔵品を学ぶことができる内容であった。

④台湾調査

2019 年 2 月に調査した台湾の美術館では、2016 年の現政権設立以降、「台湾のアイデンティティ確立」を目的とした美術館構想が進んでいた。

台北市立美術館は大規模改修にあたり、2000 ㎡を超える地下空間を「児童教育芸術センター」として 2014 年にオープンさせ、教育部の企画する展覧会やワークショップを行っている。また、台北市による「育藝深遠」計画は、小学校 3 年生 2 万人弱の台北市立美術館への訪問を、交通費まで含めて市が負担するという芸術支援プロジェクトである。

2015 年に改訂された台湾のナショナルカリキュラムも、日本同様に創造力、思考力、探求力、コミュニケーション力をつけようとしており、その手段のひとつとして「美感教育」が重視されているが、これを受けて「美感教育基地」を目指すのは、国立台北教育大学北師美術館である。特に近年始まったワンピースミュージアム（OPM）プロジェクトは、美術館が所蔵する作品を学校に数年間貸出し、美術館の支援を受けながら、学校が様々な教育活動を展開するという、世界でも例を見ないものである。貸し出す作品は、2012 年にニューヨークのメトロポリタン美術館ら譲り受けた、西洋古典彫刻の石膏像 120 点。希望する学校がここから 1～数点を選び、数年間借り受けることができる。学校は北師美術館の助言を受けながら空き教室やロビーなどを展示室に改装し、作品を展示し、開会式を行う。教員は研修を受け、作品を活用した授業を行う。時には、石膏像の修復そのものにも児童生徒を参加させることによって、児童生徒が石膏像を通して、文化財の修復や歴史などを学ぶ総合的なカリキュラムや、子どもたちの作品や文章が一緒に展示される学校美術館が、台北市を中心として各地で生まれている。

台湾では他に、台北当代芸術館、国立台湾歴史博物館、奇美美術館を訪問し、台湾文化部博物館科でも博物館政策についてインタビューを行った。

(2)海外調査からの考察

これら北欧とアジアの海外調査から、地域による違いはあるものの、美術館のスクール・プログラムに共通するのは、①対話による探求的な鑑賞（対話鑑賞）が広く行われていること、②各国の教育課程が反映されていること（カリキュラム・リンク）、③美術科以外の教科へも学びを

拡げようとしていること（教科横断型）、④オンラインの活用であることが明らかとなった。これらは所蔵作品に明確に基づいた教育方針に従って展開されている。この傾向は、これまで調査した米国、豪州と同様であり、③④についてはその傾向がより顕著になりつつあることがわかった。

(3)オンライン教材の開発

これらの調査結果を反映し、小学校から高等学校までの授業で活用できるオンライン上のデジタル教材「鑑賞素材 BOX」https://box.artmuseums.go.jp/を作成した。掲載作品は、国立美術館のうち所蔵作品を擁する５館（東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館）の所蔵作品 62 点である。前科研の成果物「鑑賞教育キーワード map」をベースにしながらも、新たに①～③の特徴を付け加えた。

① ICT 環境への対応

美術館が提供する鑑賞作品アーカイブ：所蔵館やジャンル（洋画、日本画、立体、デザイン、版画、写真、工芸）、2 種類のキーワード（後述）で検索、絞込をすることにより、教員は授業の目的に沿って候補作品を選ぶことができる。作品毎に「作品解説」、「よく見るためのヒント」（問いやアクティビティ）、「みんなの感想」（発言例）、「キーワードの理由」を参照できる。

高精細画像：拡大に耐え、細部まで詳細に鑑賞できる高精細な作品画像を掲載している。美しい画像を電子黒板へ映写したり、QR コードを使用してタブレット端末へ配信したり、オンライン会議システムを使用して遠隔地教育に活用したりすることで、鑑賞教育の幅が広がる。複数枚を並列させた比較鑑賞も可能。

ワークシートの出力：選択した作品をワークシートにして配布・印刷できる。

② 2 種類のキーワード

図工・美術キーワード： 形、色、材料、光、用具、構図、遠近、人物、動植物、風景、静物、空想、神話と宗教、抽象、写実、文脈、象徴、様式、印象派、日本、諸外国

他教科へのひろがりキーワード：公共（コミュニティ）、生命、身体、生活、自然、環境、エネルギー、郷土、理数、音楽、異文化、自由、平和と戦争、食、伝統、文化、時代、アイデンティティ、ジェンダー、文化遺産　※美術以外の教科の学習指導要領解説書から抽出しており、教育課程上の概念が反映されている。

③ 「授業のアイデア集」

20 本の授業のアイデアを、小学校から高校までの発達段階別に、関連する教科（図画工作、美術、国語、社会、音楽、英語、理科、外国語活動、特別活動、家庭科、技術家庭、道徳）とともに示している。

以上により、研究の目的に挙げた①海外の美術館調査、②探求的な鑑賞教材の開発、③研究成果の公開は、ほぼ達することができた。

2020 年現在、新型コロナウィルス感染拡大のため、休校や休館を余儀なくされた学校と美術館では、オンラインの活用が急務となっている。鑑賞教育において、美術館で生の作品に触れることの大切さは変わらないが、学校＝美術館連携において長年解決できなかった「美術館が遠い」「時間が無い」「交通費などの予算がない」等の諸問題は、オンラインによって解消できる可能性がある。今後コロナ禍が終息したとしても、教育現場はオンラインとオフラインを併用した学習形態になっていくだろう。そのようなタイミングで、教科横断型の探求的な鑑賞授業を全国どの学校でも行えるように支援するオンライン教材を提供できたことは意義深い。

現行の学習指導要領には、その総則に「カリキュラムマネジメント」が記載され、教科横断型の学習が求められている。今後この「鑑賞素材 BOX」を活用し、図工・美術のみならずさまざまな教科で鑑賞学習が試みられることを通して、教科横断型の学びにどのような効果が生まれるかについて検証したい。

---

[i] 平成 24-26 年度　科学研究費助成事業研究基盤研究（B）「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」研究代表者：一條彰子

[ii]著作権許諾期間終了のため、現在はサイト閉鎖中。

[iii] 前科研において「探求」的な鑑賞と訳した inquiry based appreciation には、「探究」の漢字を用いることも多い。「探求」はあるものを探し求める・手に入れること、「探究」は物事を解明する・理解することを意味する。ここで扱う対話鑑賞においては、両方の行為が含まれるが、前科研に引き続き本科研では「探求」と表記する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計19件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 一條彰子、奥村高明、寺島洋子、細谷美宇	４．巻 -
２．論文標題 美術館の所蔵作品を活用した探求的な鑑賞のためのデジタル教材	５．発行年 2020年
３．雑誌名 美術家教育学会千葉大会発表概要集	６．最初と最後の頁 0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮本友弘，奥村高明，東良雅人，一條彰子	４．巻 6
２．論文標題 中学校における美術鑑賞学習の自己評価尺度の開発－資質・能力の三つの柱の観点から－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	６．最初と最後の頁 45-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 奥村高明	４．巻 81
２．論文標題 美術館を開く～台湾、北師美術館の挑戦～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本文教出版Webマガジン まなびと「学び！と美術」	６．最初と最後の頁 webのため頁無し
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 奥村高明	４．巻 90
２．論文標題 「ラウンド・ダイアローグ（役割交代鑑賞）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本文教出版Webマガジン まなびと「学び！と美術」	６．最初と最後の頁 webのため頁無し
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 東良雅人	4．巻 998
2．論文標題 新学習指導要領とICTの効果的な活用	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中等教育資料	6．最初と最後の頁 34-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 東良雅人，臼井学，豊口和志	4．巻 1002
2．論文標題 中学校美術科，高等学校芸術科（美術，工芸）における「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中等教育資料	6．最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺島洋子	4．巻 -
2．論文標題 美術館における鑑賞ツールの活用 - 国立西洋美術館のびじゅつーるを例として	5．発行年 2020年
3．雑誌名 女子美術大学美術館コレクション展　作品と授業をつなぐ試み　報告書	6．最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 一條彰子	4．巻 626
2．論文標題 フィンランドの美術館教育リポート - 美術館×学校×行政	5．発行年 2018年
3．雑誌名 現代の眼	6．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奥村高明	4．巻 62
2．論文標題 放課後学校の充実ーエスポー美術学校の調査報告から	5．発行年 2017年
3．雑誌名 学び！と美術	6．最初と最後の頁 （ウェブ掲載）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奥村高明	4．巻 **
2．論文標題 図画工作　授業づくり三つのポイント	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『授業力＆学級経営11月号』明治図書	6．最初と最後の頁 88-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 東良雅人	4．巻 68-11
2．論文標題 育成する資質・能力と学習内容との関係を明確にした授業づくり　-子供たちが自分の中に新しい意味や価値をつくりだす創造活動-	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『兵庫教育』 兵庫県教育委員会	6．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 東良雅人	4．巻 72-5
2．論文標題 創造活動を通して，生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育む	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『総合教育技術』 小学館	6．最初と最後の頁 50-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 東良雅人	4．巻 6599
2．論文標題 美術と豊かに関わる資質・能力を育成	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『内外教育』 時事通信社	6．最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 東良雅人	4．巻 4
2．論文標題 子供たちに生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育む	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『NACT Review国立新美術館研究紀要』	6．最初と最後の頁 230-231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥村高明	4．巻 --
2．論文標題 「みる活動・いろいろな鑑賞活動～作品をみることで育つもの」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 編著辻泰秀「図工・美術教育へのアプローチ『造形教育の手法　えがく・つくる・ みる』」	6．最初と最後の頁 180-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥村高明	4．巻 888
2．論文標題 「鑑賞教育の課題と今後の展望」	5．発行年 2016年
3．雑誌名 「教育美術」	6．最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥村高明	4．巻 --
2．論文標題 「整理された「知識・技能」と具体化した「見方・考え方」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 無藤隆編「中教審答申解説2017」「社会に開かれた教育課程」で育む資質・能力」	6．最初と最後の頁 162-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 東良雅人、教育課程研究会編著	4．巻 --
2．論文標題 「図画工作科，美術科，芸術科（美術，工芸）とアクティブ・ラーニング」	5．発行年 2016年
3．雑誌名 「アクティブ・ラーニングを考える」（東洋館出版）	6．最初と最後の頁 86-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺島洋子	4．巻 949
2．論文標題 「鑑賞する能力を育てることの重要性」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 初等教育資料	6．最初と最後の頁 76-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 一條彰子
2．発表標題 これからの社会を生きる力を探究的な美術鑑賞で育む
3．学会等名 全国高等学校美術工芸教育研究大会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 一條彰子
２．発表標題 シンポジウム「芸術は、あらゆる学問とつながり社会を拓いていく」
３．学会等名 美術と教育　全国リサーチプロジェクト
４．発表年 2020年

１．発表者名 一條彰子、奥村高明、寺島洋子、東良雅人
２．発表標題 美術館の所蔵作品を活用した探求的な鑑賞教育プログラムの開発-フィンランド・デンマーク海外調査の報告
３．学会等名 第40回美術科教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 奥村 高明、三澤 一実、水島 尚喜
２．発表標題 学習指導要領改訂と美術科教育のゆくえ―学会40年の歩みとこれからの課題―
３．学会等名 第40回美術科教育学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 室屋泰三
２．発表標題 任意波長を持つ階段関数系による絵画画像の色彩変化の計量の試み
３．学会等名 日本色彩学会 平成29年度全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 室屋泰三
２．発表標題 再帰的2分割による任意波長を持つ階段関数系の構成の試み
３．学会等名 日本色彩学会画像色彩研究会平成29年度研究発表会
４．発表年 2018年

１．発表者名 室屋泰三
２．発表標題 「区間3分割による階段関数系を用いた絵画画像の色彩変化の計量の試み」
３．学会等名 日本色彩学会平成28年度研究会大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 室屋泰三
２．発表標題 「絵画画像の色彩の構造を離散的に捉えるための試行」
３．学会等名 日本色彩学会画像色彩研究会平成28年度研究発表会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 山口周、一條彰子	４．発行年 2019年
２．出版社 東京国立近代美術館	５．総ページ数 51
３．書名 Dialogue in the Museum -ビジネスセンスを鍛える美術鑑賞ワークショップ	

１．著者名 奥村高明他16名	４．発行年 2018年
２．出版社 日本文教出版	５．総ページ数 181
３．書名 文部科学省「小学校学習指導要領解説　図画工作編」（協力者）	

１．著者名 奥村高明他14名、吉富芳正編集、	４．発行年 2017年
２．出版社 ぎょうせい	５．総ページ数 pp2-17
３．書名 第1章「新学習指導要領が求める子供像」『次代を創る「資質・能力」を育む学校づくり２』	

１．著者名 監修：奥村高明、横山勝彦、半田滋男、池上英洋	４．発行年 2016年
２．出版社 美術出版社	５．総ページ数 253
３．書名 「美術検定」実行委員会編「はじめて学ぶ美術の歴史一問一答　美術検定２級練	

〔産業財産権〕

〔その他〕

鑑賞素材BOX（科研費研究成果報告ウェブサイト）
http://box.artmuseums.go.jp/
主に小学校から高等学校までの授業で活用されることを想定したデジタル鑑賞教材。国立美術館５館（東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館）の所蔵作品62点の高精細画像を、教室の電子黒板で投影したり、生徒の持つタブレット端末に配信したり、ワークシートを作成することができる。教員は「図工・美術のキーワード」や「他教科へのひろがりキーワード」を活用したり、授業案を参照したりして、授業を準備することができる。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	奥村　高明 (Okumura Takaaki) (80413904)	日本体育大学・児童スポーツ教育学部・教授 (32672)	
研究分担者	東良　雅人 (Higashira Masahito) (70619840)	国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官 (62601)	
研究分担者	寺島　洋子 (terashima Yoko) (00270421)	独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・リサーチフェロー (82622)	
研究分担者	室屋　泰三 (Muroya Taizo) (30537329)	独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・主任研究員 (82621)	
研究分担者	細谷　美宇 (Hosoya Miu) (30639539)	独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・研究員 (82621)	
研究協力者	今井　陽子 (Imai Yoko)	東京国立近代美術館工芸館	「鑑賞素材BOX」解説・キーワード執筆
研究協力者	松山　沙樹 (Matsuyama Saki)	京都国立近代美術館	「鑑賞素材BOX」解説・キーワード執筆
研究協力者	藤吉　祐子 (Fujiyoshi Yuko)	国立国際美術館	「鑑賞素材BOX」キーワード執筆

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	伊藤　貴光 (Ito Takamitsu)	葛飾区立西小菅小学校	「鑑賞素材BOX」授業案執筆
研究協力者	大黒　洋平 (Daikoku Yohei)	荒川区立諏訪台中学校	「鑑賞素材BOX」授業案執筆
研究協力者	寺村　奈津子 (Teramura Matsuko)	下北沢成徳高等学校	「鑑賞素材BOX」授業案執筆
研究協力者	古澤　圭子 (Furusawa Keiko)	柏市立土南部小学校	「鑑賞素材BOX」授業案執筆
研究協力者	丸山　宏 (Maruyama Hiroshi)	（千代田区立九段中等教育学校	「鑑賞素材BOX」授業案執筆
研究協力者	端山　聡子 (Hayama Satoko)	横浜美術館	台湾調査コーディネート